

# デーリー東北 2023年(令和5年)9月3日(日曜日) (6)

## 川守田礼子

八戸工業大感性デザイン学部准教授



かわもりた・れいこ 1967年、旧福地村生まれ。東北大学文学部卒。八戸工大二高を経て、2001年より八戸工業大で勤務。人形浄瑠璃文楽などの伝統芸能や染織に関わる伝統文化、特に南部菱(ひし)刺しが研究テーマ。第3回インテリジェント・コスモス東北文化奨励賞を受賞。文楽はちのへ塾主宰。

### 藍染めから感じる植物の生命

本日9月3日、八戸市内で「TOYOTA SOCIAL FESTIVAL presents 青森環境保全プロジェクト」が開催される。このイベントは、トヨタ自動車

が全国で展開している環境保全の参加型アクシオンプログラムで、本年度は久しぶりの対面実施となる。デーリー東北新聞社が主催する第1回八戸会場では、沼館緑地公園の清掃活動を行うとともに、藍染め体験を通して自然環境について学習するという内容

## 自然の恵みに真摯な気持ちで

だ。八戸工業大の学生たちと一緒に藍染め体験を担当することとなり、夏前から準備を進めてきた。今回は、刈り取ったフレッシュな藍葉を使って水だけで染める「生葉染」を行う。藍という植物は、生花店では販売されていないし、自生もしていない。よって、この日のために、共催のNPO法人「循環型社会創造ネットワーク(通称CROSS)」の担当Tさんが、自宅の畑で

藍を栽培してくださった。5月に播種して以来、この猛暑の中、毎日の水やりだけでも相当な苦勞だったと思う。丹精のかいあって、藍は青々と元気が育った。Tさん、ありがとう。この藍からどんな色が染まるのか、70人で一斉に行うひと夏の藍染め体験をとても楽しみにしている。

藍染めには生葉染と建築の2種類がある。一般的に藍染めと聞いてイメージするのは、建築めによるインディゴブルー、紺色だろう。タテ藍の葉を加工した「すくも」を用いた天然灰汁発酵建てによって染める技法で、藍がめに藍の溶液を作った布を浸して染める。すくも作りにも、すくもから藍液を作る(藍建てという)のにも高度な技と長い時間が必要だ。(ちなみに青森県三好町の「あ

色」で調べると、浅葱色に合致する。英名でブルーターコイズ。平安文学にも登場し、江戸時代にもたびたび流行色となった。南部地方では、菱刺しの布地を染めた色として「存じ」の方もいらっしやることだろう。簡単なような生葉染も実はなかなか手ごわい。はじめはテキスト通りに藍葉をミキサーにかけて粉砕する方法を採用するも、藍シュー

という学生の素朴な反応が面白い。染液から引き上げる時、最初は緑だった布が空気に触れて青に変わる神秘的な一瞬がある。その変化を見逃すな、と伝えたい。目の前で起る青色の誕生は、藍という植物がダイレクトに発信するメッセージなのだ。「私は藍を手がけることによって、植物が単なる色だけでないことを知り、植物の側のいい分、言葉にならない言葉や形態から何かをさぐる」とし、植物の言葉や様子をわかる耳や目をもちたいと痛切に思いま

## 私見 Sunday 創見

おもり藍は、すくもとは異なるパウダー化した藍葉を用いた画期的な藍染め技術である。これに対して、生葉染は、採取した藍葉をフレッシュのまま擦りつぶして染液を作る。新鮮な藍葉と水と空気があればできる非常にシンプルな方法である。藍葉に含まれる水溶性で無色のインディカンが空気に触れ酸化してインディゴが生まれる。この生葉染から得られる色を文献「日本の傳統

スにするのに時間がかかり、時間がたつと色素の沈殿が進んで布は染まらなかつた。手できつって袋ごとにもむ原始的な方法に変更。雨の日に染めると同じ方法でも色が濁る。水や空気だけではなく、陽光や風も染めに影響しているようだ。さまざまな発見をしながらゼミ生と夢中になって試行錯誤を繰り返して、今の方法にたどり着く。大学の工芸実習では「こんな草からなぜ青が出るのか!」と

染織家の志村ふくみは、植物染めについて多くの哲学的な言葉を残しており、読むたびにハッとさせられる。志村は染色を自然から「色をいたたく」行為とみなす。植物は決して色を出すために存在するわけではないが、私たちは古代より染料として活用してきた。植物の命ともいえる色彩を手にするとき、自然の恵みに対して真摯なる気持ちを忘れたくない。

※この記事・写真等は、デーリー東北新聞社の承諾を得て転載しています。